

会報

第一号

昭和33.6.1
兵庫県兵庫郡山崎町
教育委員会内
兵庫郷土研究会
電話二三番

発刊の辞

会長 山崎町長 村上彰君

一時中断していた本会が、多くの志を同じくする人々の力強い意欲に支えられ、新しく発足することができましたことは、慶びにたえられませぬ。

今の時代は何事によらず、新しきもののみを追うということが流行していますが、古きを訪ねて、その文化の跡を探索し、私達の住む郷土の歴史を知ることが意義深いことと思えます。そうして、このような研究の上に立つて、新しい宇宙時代に処してゆきたいものです。

この郷土研究会が、草深い兵庫の文化性を高め、香りの高い会として進展し、町政の上に裨益すること大なることを信じますので、大方諸賢の御支援育成をお願いして発刊のあいさつといたします。

大きな期待を

桐山宗吉

社団法人兵庫県観光連盟
専務理事

人々は自分の生れたところ、住んでいるところに就いての知識に寡外乏しいものです。

殊に地質や植生や鉱物や、そして史跡、民俗芸能、習俗等々、知っていてもその真の良さや価値や、死んや埋もれていた祖先の遺物などに至ると、他から指摘されてはじめて吃驚し、疏ま、そして今さら成程と頷くようなことが間々あるようです。

兵庫郡は山また山の、人は随分早くから住みついていたろうが、何分にも交通不便で知られていないことが多い。立派なものが多数にあるらしいが、文化的発掘がおくれている、その真価が明らかになされていません。

私どもが「ここにこういう踊りがあったはず」と、調査に参ると、やっとその地元の人が「あれがその様に学的に貴重なのですか」と、驚かれるようなこともありました。

兵庫郡一円にはまだ、こらした隠れた立派なものがあると思えます。楽しみです。

できれば私も皆さんと一緒に実地踏査や研究に参りたいくらいですが、兵庫郡にもその道の良き研究家が多数にいられることで、次々とすばらしい

報告の出るのを衷心から期待しております。

それと共に、山崎町はもとより、一宮、波賀、安富各町、千種村の各当局と議会が、この貴重な研究に協同して、醸出の上での当然の理解を尽くされることを望ましいものです。

會報の発刊によせて

島田 清

三月二十一日、花々しく再発足した「矢栗郷土研究会」では、純いて會報を出されることとなった。まことに順調なすべり出しである。私は、まず、何よりもこのことをおよろこびしたいと思う。

矢栗郷土研究会の會報は、これまで、昭和七年から九年までの間に七冊、同二十一年から二十三年までの間に五冊が出ている。前者は、主として安田青風先生の編輯であり、後者は、私の編輯したものであるが、どちらにも、数年を経ぬうちにとまつてしまったのは、會員の数が少く、会の基礎が食しかつたためである。ところが今回は、會員の数が五百を越え、これまでに見ぬ鞏固なものとなった。県下の郷土研究団体をながめてみても、これだけの會員数を持つているところは

数えるほどであり、皆さんの理解と熱意のほどが察せられる。

山崎町当局も、山崎町教育委員会においても、この事業に対してはいろいろと援助して下さるようであるし、本会創立当初からの有力会員も、引続いてお世話をしていただいている。また新しく加わられた方々も熱心に協力されて、会の土台は磐石の重みを加えた。思うことは何でも述べあい、検討しあつて、どうか、長く続くようにしてほしいと思う。

會報は、そのためのよき広場となり、発展のための大切な機関になることであらう。會員各位の自重と精進をこいねがつてこまごまい。

會報の再刊されるのを喜び、思いつくまきを述べて序文とした次第である。(昭和33.4.30)

ふるさと

岸野 市 五 郎

ふるさとの山に、ふるさとの川。ふるさとの風物は一木一石に至るまで、懐しいものでございます。その風物は故郷を離れて、一層懐しく、また、年をとる程に、いよいよ、なつかしさを増すものです。

人工衛星さわぎも一段着いたしました今日、この次

は、世界中のどこで何が飛び出すかと、人々の眼が科学の前方ばかり見つめて、足もとを奪われ、古文化をたずねることを忘れ勝になつて居ります。

この際、去る三月に、故前野猛夫氏、安井寅一氏、志水審治氏、春名荒太郎氏、横井怨一氏等の方々のお骨折で四百名近い多数の会員を持つ、兵庫郷土研究会が再出発したことはスバラシイことであり、またこの上もない有難いことでございます。どうか此の研究회가村上会長はじめ、会員各位の方で、郡民の心の灯火となり、エネルギ一の源泉となるようにお祈りする次第でございます。



歌の風土記

入 江 静 夫

郷土の香り高い歌の数々の中に、仕事歌や、名所や風俗を歌った歌が沢山あります。昨年大阪中央放送局より歌の風土記兵庫県の巻で、アナウンサー後藤憲美さんや土地の方々により放送しました歌をお聞きになった事と存じますが、郷土の歌は懐かしいものです。その中の一つ二つをお知らせします。

石塙き歌へ山崎町葛天に伝わる土地の雰囲気のある

歌

一、山がなれども小茶野の名所 ソリヤク

音に名高い コリヤ 紅葉橋 オモシロイ

アラナンジャイナール ヒョータンジャ エンヤエント

二、うちの裏には二又の榎 ソリヤク

榎の実ならいでもせぜがなる (一に同じ)

もみすり唄 (一言町葛原に残っているのんびりした歌)

一、挽いておくれよ一番挽きを

後の二番はとにかくも

二、秋が来たかよ 産さえなくに

何で紅葉が 色づかぬ

三、五月水ほど 恋いこがれても

今は秋田のおとし水

四、山が高いので繁盛が見えぬ

繁盛恋しや 山にくい

亦、旧くから伝わった歌で「ちゃんちやか踊り」の様な歌もあります。流行歌で影を無くしつつ、民謡を探して見たいものです。

ちゃんちやか踊の際に歌った歌

(葛天の上ノに伝わる歌)

せど川踊り

こをきり 小竹が をさのをて えぎりしよ

いつもでてこぬ せど川へ 今夜出て来て名を流す
おれをしのばば冬つばき 色に出さづと目でしのべ
おれをしのばば橋詰よ 水はななうけまだ会えぬ
しらすすりのそばにねて思ひよらずとみをうめた

実粟鉄について

宇野正彦

那北の山地を歩かれたことのある方々は、谷向の各所に所謂「カナクソ」の山がうす高く集積されているのを見られること、思いますし、戦時中にも、戦後の現在でもこの「カナクソ」が鉄鉱資源に乏しい我國の製鉄原料の一部に利用するために搬出され、又搬出されつゝあるのを御承知のこと、存じます。

幕末、明岩に西洋流の製鉄法が伝えられるまでは本那産の鉄は、他地方の鉄と共に刀剣や其他の器具類製作の原料として甚だ珍重せられ、その名も「実粟鉄」「千種鋼」と称せられて居ったのであります。大正九年に刊行せられた「千種村是」は神戸又新日報の掲載を引用して、皇后様の御守刀になつたのは千種鋼であつたと記して居りますが、これは千種鋼が全国的に名声を得ておつたことを示すものと言ふことが出来ると思ひます。

二の本那産の鉄についてはすでに関心をもちたれた方々によつて地味ではあります研究されております。私が知りえた範囲で申しますと「兵庫史学」に小原義男氏が「千種鉄」の論文を発表され、「志佐液」にも同様発表あり。「東北地理」に田辺健一氏が「兵庫実粟那下のタタラ鉄滓調査報告」を発表されております。又、「近畿民俗学会」では「奥播磨民俗探訪録」に音水鉄山の調査報告が掲載されております。又、神戸新聞に連載されました「祖先の足あと」の筆者である赤松啓介氏も昭和三十二年十月二十五日の記事に、千種鉄の調査は日本製鉄史の力骨を握るものとして、その研究の重要性を述べて、考古学者和島誠一氏を同伴千種村を訪ねて居られます。加西那北系町の三枝啓介氏も、播磨郷土研究誌上に「播磨刀工略史」を執筆中ですが、「実粟の刀工及び実粟鋼」について相当に頁数を費しておられます。尼崎工業高校の田淵保雄氏も調査に未練されております。又、嘗つて千種村駐在巡査であつた安東某氏は千種村の山谷を巡視中に、この方面の調査にも趣味を有せられ研究もかひりず、んでいたときいて居りますが、発表されたものを拜見する機会をえないのを残念に思つておりますし、小原某氏はタタラ歌を録音テープにとられていると聞いておりますが、波賀町野尻の種本善正氏は鍛刀の方面から

衆鉄に関心を持つて研究をすゝめておられます。尚、近年、日本製鉄史の研究の必要性が論議され、岡山、広島、鳥取、島根等の中国諸地方の研究者向に「タタラ研究会」が結成されて、古代から近世に亘る総合研究が企画され、遺跡の発掘調査や、文献による研究がすゝめられて、全国的な学会として発展しつゝあります。

ところが、「千種鋼」として名声をもつ本郡の製鉄事業の研究をして見ますと、残念なことに史料がすでに散逸して見るべきものが誠に少ないこととあります。村々の古老にしてみましても、実際に製鉄事業についての経験はなく、少年時代に見たおぼろげな記憶でもあれば良い方で、伝承としても食糧なものしかえられないのが現実なのであります。その上に「カナクソ」でも次々に搬出され、売却されて、漸次その量を減じてゆく有様で、おそまき乍らでも、今直ちに資料を整理、記録してゆかなければ、将来は更に研究が困難をきわめることになるのを憂えております。会員諸氏のお手もと或いは御親戚、知己の宅には案外に眠っている史料があるかも知れないのですが、是非共御土史研究の進展のため関心を高めて頂いて、資料の発見に御協力を賜りたいと存ずる次第であります。(これは単に製鉄関係のみではありませんが——)



殿様敷古墳調査報告

山崎高校地歴班

去る三月末に、兵庫県山崎町須賀沢字梅ヶ谷、内海保雄氏所有の「殿様敷」を閉壟中、古墳が発掘された。以下調査報告をする。

一、古墳位置及形式

願寿寺より上手の国道より北側の傾斜地を約一五〇米上った道路右手の傾斜地の閉壟地であり、覆土は取除かれていたが、直径一〇米前後の小円墳である。古墳時代後期のもものと思われる。石室の石は比較的小さい粗雑な石が使用されている。蓋石は一個のみ、内海家の庭に運ばれている。他は明瞭でない。

二、伝説

内海家の伝承では、殿様に貸金したが返済出来ぬのでこの土地を代償に得たので「殿様敷」と称し、円墳の上には柵の太木が生えていた。

三、出土品

須惠器蓋付杯(六個) 外破片多数 金耳飾(五)
鉄製直刀(二) 鉄製轡(一) 鉄鏃(四) 銀耳飾(一)
釘状鉄武器(一) 外鉄片あり、赤生式土器(出土地は古墳附近)
壺の底部、高杯の足部、破片其他。

明治十年頃の物価

栗山宗知

兵庫県山崎町須賀沢、内海保夫氏宅で古墳を拜見の時、酒類の値段表を発見し、その上下の激しいのに驚くと共に、現在との開きの多い事を面白く思つて、左に当時の重なるものについて記してみた。酒は、新酒、古酒、並酒、上酒と分れて、それぞれ一、二銭の開きがあるが、一月に安くて、十一月頃に二、三銭の値上りがある。単位は一升で、金額は銭。

	(明治十年)	(全十一年)	(全十三年)
酒	新七—一〇銭	九—一二銭	一—一—五銭
焼	酎 一六	一八	二二
み	り 二〇	二二	二六
す	六		七
米	四		
麦	三		六、二
割木(一駄)	二五		二五
人夫(一人役)	六		
便用人(一ヶ年)	七円		

郷土史料解説

(一)

安井俊二

兵庫県誌 未刊本である。僅かに写本で伝つてい
る。徳久屋本、内前屋本、妹尾本、栗山本などがある。
原本は不明で、序文のついている徳久屋本がやや原本
に近いと思われる。二百五十年前の宝永五年に山崎町
山田町片岡醇徳(米屋五郎太夫)が書いた本で、内容
は、郡境、郷、城、市、山川、宮社、土産、地勝、風
俗、人物、寺院と項目を立てて郡内各地の貴重な記事
が多い。醇徳は相当な学者であり、当時としてはあら
ゆる史料と実地踏査をして書いている。ただ「播磨風
土記」は、後年発見されたので、その資料として取り
入れられていないのが残念である。同人は別に「兵庫
郡守令交代記」(別に解説するが)を元禄十二年に着
わしている。この本の復刊を痛切に感じて、近日播磨
史談会と本会共同で刊行準備中であるので、皆様に読
んで頂く日も近いと思う。



伊和神社

安黒義郎

會報

伊和神社は、大己貴神を主神とし、少彥名神、下照姫命を配祀とする。大神の名前は別に大名持御魂神とも申し、産業を勧め、医業の法を定め、若病の術を教えなどして、社会の人達の幸福と安穩を図り給うた。それら大神の伝説は、播磨一円にわたつてとどめられている。

神社の創祀については大神が各地御巡歴の最後に、伊和里へ現在当社のある地方へに帰り来られ、我が事は終つた、「おわし」と仰せられ、神鎮りましたとつたえており、即ち大神饒蕪の地で国人はその御恩徳を慕つてこゝに社殿を営んで奉斎したので創祀であります。神社の社殿は多く南面又は東面しているのが普通ですが、当社は鶴石のいわれもあるが、故郷出雲をお慕いになつてか、北西の方を向いており、めずらしい姿だとされています。

爾来、時代の變遷は、社運の上にも盛衰の迹をとどめたが、現今なお播磨の国の一の宮と仰がれ、一回鎮守の第一の宮と尊ばれているのである。

前野猛夫氏

兵庫県山崎町、明治三十五年生、四月十日突如永眠されました。本会の前会長、元山崎町長で本会再発足に特に尽力下さった方。謹んで哀悼申します。

三月二十一日山崎中央公民館で、本会再発足の第一回總會開催。会員六十余名出席、横井恕一氏司会、前野猛夫氏議長となり、前野氏の挨拶、安井寅一氏の郷土会の沿革についての話の後、会則承認、役員選任を終り、会後、島田清氏「兵庫県古文化財と文蹟」の演題による有益な講義があり、四時二十分閉会。同日午後七時半、莚屋旅館において、島田清氏を囲んで座談会を開催、地方俳人、句碑などについて座談出席者約二十名であつた。

安志古文化財見学。五月十一日午前十時安志教蓮寺に集合、下村慶之助家内にて

- 南善寺 水庵の扁額、達磨木像、経筒等
 - 今念寺 弘安三年二月銘の五重石塔
 - 加茂神社 境内巨木と苔の広庭
 - 光久寺 国宝不動明王像など
 - 法性寺 最勝院殿筆法華經、各大名の和歌短冊軸
- を觀賞し、法性寺境内の温泉場に休憩。参加者十名、天候にあまり恵まれず遺憾であつた。

兵粟郷土研究会々則

第一条 本会は兵粟郷土研究会と称する。

第二条 本会の事務所を兵庫県兵粟郡山崎町に置く

第三条 本会は文化財の保存、維持及び調査研究をなし、地方文化の振興をはかるを以つて目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達せんがため、左の事業を行う

- 一、 随時例会を開き会員の調査研究を発表する
- 二、 会報及び機関紙を発行、又は古文書等の復刊

- 三、 斯道の權威者を招き、講演会、講座を開催
- 四、 史蹟又は古文化財の実地調査、見学
- 五、 其他必要と認める事項

第五条 本会の趣旨に賛成するものを会員とする

第六条 本会に会長一名、副会長二名、幹事及び会計若干名を置く

必要があるときは顧問、名誉会長、名誉会員を置くことができる

第七条 会長は会務を總理し、副会長は会長を補佐し

幹事は会務を執行する

第八条 役員の任期は二ケ年とし、総会に於て会員中

役員名簿

会長	村上 彰治
副会長	岸野市五郎
幹事	安井 寅一
	志水 富次
	和田 秀夫
	横井 怒一
	三木金之助
	春名荒太郎
	入江 静夫
	福井 説次
	宇野 正瑛
	福井 政男
	栗山 宗知
	下村慶之助
	田内松右エ門
	庄 和夫
	平形 謙岩
	横井 怒一
顧問	島田 清

より互送する

但し会計は幹事会において推挙する

第九条 本会の總會は、毎年十月開催し、必要あるときは随時開催する

第十条 会員は、毎年金壹百円也を会費として醸出するものとする

原稿募集



会報第二号は八月に発行の予定ですから、七月末日までに多数の御出稿をお願いいたします。誌面は僅かですので、四五百字までのものを歓迎。やがて会誌発行のときは、長文の研究発表をして頂く予定です。(編輯者 入江、和田、宇野、安井)

安井 淳三	森田 茂	志水 潔	(門前)	志水 武雄	長田 久也	矢野真之助	尾崎 茂樹
加納 玄一	山根 省吾	春名荒太郎	根岸 元彦	藤本 嘉男	片山 英之	早川 玄司	青山 実
淡井のり子	八田 幸夫	菅原 桓夫	安井 良一	伊野 利夫	可藤市郎平	片山 元岩	平山 順岩
(西康天)	池田 熟	宗接良之助	安井 俊二	内海太一郎	藤井 慧乘	片山 元岩	大谷作次郎
大井万兵工	谷口 二郎	滋井 至孝	福山 清一	(戸原)	藤井 慧乘	(菅野)	(千種)
春名 謙介	菅谷 正三	小林 登	福安 敬岩	金山 徳身	長井 政岩	長田 重男	(千種)
田中 稔	竹家 善二	小林 善一	高田 影秋	宮本 英一	横野 一夫	長田大三郎	住江宗三郎
岸野市五郎	城内宇三郎	上西 久	中村 直美	松居 八郎	猪尾 健一	志水 孝二	井上卯三郎
三木金之助	田路 強	中西 善吉	中村 直美	井口 雅雄	下村 光岩	福井 政男	井上卯三郎
名賀 市郎	山下 要一	丸山 誠二	(加生)	志水 善好	泉山 行雄	藤田 郁岩	(波賀)
藤村 洪	世木 新	八木 政夫	大西 信次	(安富)	泉山 宗知	尾鼻 正一	田中 秀雄
三里守太郎	鎌田まつ丞	山本 充	中村 圓吉	中村 潔	山下 宇市	伊塚 義雄	田中 堅一
岡本 義則	高島 豊	熱田 久雄	(域下)	松下 政岩	岩原菊次郎	西沢 謙道	田住 竜
鈴木 秀吉	坂本 初岩	日下 修一	西川 八郎	松下 政岩	井上 盛夫	後藤光太郎	久宗作太郎
高井 新	藤田 克己	森谷 吾一	西川 幸一郎	下村慶之助	(神野)	中藤 春岩	(一宮)
鈴木 利夫	平田貫之助	金尾 幸夫	森下 琢郎	吉田 元	平野 鶴岩	浅田 幸岩	(一宮)
横尾 文彦	三木 昌	春名 道弘	片山 猛	松下 政市	庄 和夫	(土方)	山本 元
鎌田真一郎	神戸 慶岩	畑中 政雄	牧野 祥子	原田 浅岩	大略 修一	赤松 繁一	上田 光夫
石沢たかの	新野 繁夫	藤岡 松子	山下 清市	野中 竜二	(葛天)	田内猪之助	前田 連
池垣 福男	中川 豊	龜永 新一	中川 透	建部 恵莉	平田庫太郎	田内松右工門	菊原 信次
長谷川友一	菫谷 せい	小倉 孝義	竹添 勉	(河原)	有元 愈	田内松右工門	久保田悦岩
西村 英男	春尾 善彦	菅原 安吉	名賀 陽三	西上 忠男	岸原はるの	田路 武	稻田 耕一

會員名義 (記入表)

安井 淳三	加納 玄一	淡井のり子	(西康天)	大井万兵工	春名 謙介	田中 稔	岸野市五郎	三木金之助	名賀 市郎	藤村 洪	三守守太郎	岡本 義則	鈴木 秀吉	高井 新	鈴木 利夫	横尾 文彦	鎌田真一郎	石沢たかの	池垣 福男	長谷川友一	西村 英男				
森田 茂	山根 省吾	八田 幸夫	池田 熟	谷口 二郎	菅谷 正三	竹家 善二	城内宇三郎	山下 要一	笹木 新	鎌田まつ丸	高島 豊	坂本 初治	藤田 克己	平田貫之助	三木 昌	神戸 慶君	新野 繁夫	中川 豊	春名 清	菫谷 せい	春尾 善彦				
志水 潔	春名荒太郎	菅原 狂夫	宗接良之助	滋井 至孝	小林 登	小林 善一	上西 久	中西 善吉	丸山 誠二	八木 政夫	山本 充	熱田 久雄	日下 修一	森谷 吾一	金尾 幸夫	春名 道弘	畑中 政雄	藤岡 松子	龜永 新一	小倉 孝義	中原 照男	菅原 安吉			
(出水町)	可児源次郎	樽岡 平祐	伊藤 親保	藤元 秀吉	安井 堅治	後藤 修二	岸本 正一	林 重範	杉本 秀志	小倉 利八	樽岡 敬祐	(伊次町)	松原 盤	三谷 源一	中川 鈴子	梶原徳太郎	堀口 春夫	竹原	名賀	陽三	(河東)	西上	忠男	岸原はるの	
藤田 辰雄	(紺屋町)	寺田 聰	片牧 光男	桓口 勝治	(寺町)	塚本 直二	野村 与一	村上 健一	立花 庚君	立花 孝一	森谷 文哉	森本 傳二	保川 恒治	(河東)	山下 新治	神山 秋君	谷口 義天	中川 義天	谷口 義天	名賀	西上	忠男	岸原はるの	藤田 耕一	
衣笠 直君	多田 嘉一	山根 一生	藤原 玄君	三木 彰	三木 秋生	三木 守	衣笠 寛	三木 徳君	中井 左君	上川 健一	立花 庚君	立花 孝一	森谷 文哉	森本 傳二	保川 恒治	(葛)	神山 秋君	谷口 義天	谷口 義天	名賀	西上	忠男	岸原はるの	藤田 耕一	
尾崎 茂樹	青山 実	平山 順君	大谷作次郎	(千種)	住江宗三郎	井上卯三郎	(夜賀)	田中 秀雄	田中 堅一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一	田中 健一

伊藤 善照	赤林 静雄	衣笠とし子
(山崎高等学校)	藤原 義宣	伊野 登教
山口 定	上林 甚大	
竹田 享	牲川 勇	工藤 栄右
下村 三郎	尾田 俊児	福井 一郎
南郷 徳吉	神名 章夫	立石田鶴緒
福井 政雄	梅林 一知	福岡キミ子
藤田 親章	田住 剛	茂田 信子
高尾 孝	大西 耕雲	阪本 和夫
安黒 義男	上野 正典	大上 善示
小島 薫	下多 謙吉	巨口ちゑ子
山口 猛雄	(山崎小学校)	前田千津子
大岩 節君	平形 謙右	谷村恵智子
宇野 正英	千崎しずゑ	西島 兼子
福井 栄子	山本 隆一	大坪 隆昭
(山崎中学校)	進藤 正春	田中 正一
木村 逸雄	黒田 吾一	(神戸市)
尾崎 正一	大谷 善云	杉本 広一
栗山 異	田路ちよ子	
井口 均	大谷喜代子	
福井 良彦	太田 紀子	
久宗 丑雄	前野 賢治	

春季見学会案内

―揚座の史蹟と古美術めぐり―

△日 時 六月八日(日)午前七時神姫バス集合

△会 費 金三百円 申込と同時に払込のこと

△昼食持参のこと、会員外の方も御参加下さい

△申込メ切 六月五日までに

本会又は横井悠一、志水富次、和田秀男、

福井詔次宛

△斯界の権威者鳥田清先生、同行説明して頂きます

巡回予定地

1. 姫路市御国野村国分寺

塔趾、山の腰古墳、壇上山古墳等

2. 加古川市加古川町北在家

鶴林寺本堂、太子堂、絵画仏像等

3. 尾上神社 釣鐘等

4. 神戸市垂水区伊川谷町

太山寺本堂、その他重要文化財多数

◎六月七日午後七時半から(山田町公民館で)「播磨路の史蹟と古美術」の講演会を開催しますから、多数御出席して下さい。

33年分会費未納の方は会計係又は最寄役員に許諾、金100円もお届け下さい。

毛糸・装粧品・化粧品

ことりきや

神姫バス前 TEL. 451

書籍・雑誌・文具

安井書店

山崎本町通 電話 700
701

食料品・酒類・飲料品

株式
会社

松本屋

山崎町本町 電話 171

小菓子司

松月堂

山崎町本町 電話 六一六

清酒

山陽盃

醸造元
山崎町 壺坂酒造有限公司

便利で経済的が

ガソリン・石油の

エンカーコンロ

取扱店 山崎町 急比地

関西代理店 神戸市中山手三電停前
(松本広一)

割烹・格鉢

名物 葉緑素風呂



山崎上町
電話 98 402

お嫁入道具・西洋家具一式

子供乗物・ワゴン・トランク 其他

株式
会社

久保タンス店

山崎郵便局前 電話 7番